

御嶽神社あれこれ

畠山重忠の実像寸描

日本風俗史学会会員
前青梅市文化財保護審議会会長

齋藤 慎 一

「古今著聞集」と「源頼朝袖判書状」

大河ドラマの影響で畠山重忠が注目されます。武蔵御嶽山と重忠伝説の現在最古の記述は、四代將軍徳川家宣の儒臣、新井白石の古武器古証の先駆、宝永六年（一七〇九）卒の「本朝軍器考」

です。「秩父御嶽山二八畠山庄司重忠ノ鎧アリ」と簡単ですが全国の名甲を展望しての当代屈指の考証学者の発言です。御嶽山と重忠のゆかりは、信ずべき甲冑と共に古くから伝承されているのです。

さて、平治の乱の四年後、長寛二年（一一六四）に畠山庄司重能の子として生まれた重忠の伝は、鎌倉幕府の編年日録「吾妻鏡」討死の元久二年（一二〇五）六月二十一日の条の地の文に、生年四十二歳と記述され、ほぼ十七歳から四十二歳まで幕府の沿革事件を通じて語られます。

「吾妻鏡」は、正応〜嘉元（一一九〇〜一二〇四）年代に編集を終えたと考えられます。後半の北条執権家の一族の編集ですから、いろいろ付度があつて苦心した跡を感じます。引用の原史料はともかく、地の文は注意して読む必要があります。もとより「吾妻鏡」は重忠にとって第一級の史料ですが、今回は「吾妻鏡」成立以前で、先入観なく

重忠が登場すると思われる文献を読んではみます。

まずは、鎌倉時代に最も充実した説話文学の傑作「古今著聞集」巻第二十七話の「力士と重忠」の話です。「古今著聞集」は「吾妻鏡」より半世紀程早い建長六年（一一五四）成立で、作者は鎌倉幕府とも関係の深い京都の公卿西園寺家に仕えた文人橋成季です。この成季が「著聞集」の成立ちかくに、同じく西園寺家に属した安芸国の地頭に下向した御家人、小早川茂平から鎌倉御家人関係の説話を十篇あまり採話したとされます。小早川茂平は、頼朝挙兵以来、側近に仕えた御家人の土肥実平の曾孫で、土肥家に伝承された逸話でしょう。いずれも、当時の雰囲気と実感をよく伝えます。重忠の大力は「吾妻鏡」建久三年（一一九二）九月十一日の条に二丈（三メートル）の池石を一人で運んだとありますが、それよりもこちらの方がずっと自然で現実感があります。一方に頼朝を登場させ、その性格、挙措の描写が対比的に描かれ、重忠の人格を際立たせて効果的です。原話がよくその情景を伝えていたので、頼朝の重忠への会話に頼朝に

とつての重忠の存在の重ささえ感じさせるのです。単なる力持ちの話しとも思われません。では「古今著聞集」巻第十一篇目「畠山重忠、力士長居と合ひて、其の肩の骨を折る事」を読んでみましょう。

設定年代は建久元年冬、正二位の頼朝が上洛し右近衛大将に任官した、翌建久二年（一一九二）以降です。頼朝は四十五歳から五十二歳代。正二位前右近衛大将です。一方重忠は「吾妻鏡」元久二年（一二〇五）六月五日、討死の条に四十二歳とあるので二十七歳から三十四歳の間、無位無官の武蔵国の名家（高家）の当主です。年齢的にも、官位官職でも全て頼朝には頭が上がりません。頼朝との関係は、話しの筋はこうです。頼朝の会話のみ引用し、後はあらすじで注目すべき語りに「」をつけてあります。

「鎌倉前右大将家」に東八カ国で一番の大力の長居という相撲取りがやってきて、「私以上に強い相撲取りはいない。いとすれば『畠山庄司次郎』だけだ。しかししたやすく負けはしません。などと言ひ詰めた。大将（頼朝）は、どうも面白くない。そこへ水干姿の重忠が参上し、侍所にすでに居並んだ大名・小名たちをかきわけて、最も上座にどつしりと座を占めた（この辺は武蔵国の高家の当主の貴禄がよくでています）頼朝は「なおい近く、それへそれへと」招じたが、重忠ははじめの

座を動かずにいた。頼朝はすぐには言い出さず、雑談してから「そもそも所望の事の候を申し出さむと思ふが、さだめて不許にぞ侍らむずらむと（きつと承諾なさらぬだろうと）おもひたまひながら、又ただにやまむも忍びがたくておもひわづらひたる」と何遍もくどくど遠慮がちに仰るが、重忠は返事を申し上げずにいる。何遍も言われるので、重忠は「ちと居なほりて（きちんと座り直して）それほどのお望みならば、と承諾すると「大将」はお喜びで「その庭に、長居めが候ぞ。貴殿と手合をして心見ばやと申候也。東八カ国打勝りたるよし自称仕まつる、ねたましうおぼえ候へば、頼朝なりともいでて心み給へ」と言われたので、重忠は思いもよらぬことと黙っている。大将は「さればこそ。これは我が身ながら、非合（失礼）なことをお願いしてしまつた。しかし、是非にお願いだ」というので立上り、きちんと身支度をして長居と立会うが、相手に少しの手出しもさせず、なんなく長居の肩を押さえつけ、動けないようしている。梶原景時が「勝負は見えました。そこまです。」と判定する。しかし、頼朝は勝負を付けよというので重忠は、長居を押しつぶすようにしてひっくり返した。重忠はそのまま座に戻ることなく、物も言わず立ち去つてしまふ。死んだかと思われた長居は、それでも命は取り留めたが肩骨を砕かれ廢人に

なつてしまおうという後味の悪い話してす。重忠の武勇を示す話ですが、実は相手を傷つけるかもしれないという力量の差も早くも見抜き、さらに勝負をしたら主人が何を要求するかも見通してなかなか立ち会わない重忠が描きだされるのです。

一方、頼朝の重忠に対しての謙つ

【翻刻】

(源頼朝の花押)

あすは、こふのこなたに
ちむのはらといふところニ
御すく候へし、いくさたち二ハ、
こふにはすくせず申
なり、かまへてひか事すな、
あかうそ三郎を、やうくニ
せん二こひたるもの、ついで
ふくしたるなり、たうしハ
ほうてう・庄司次郎ハ、
けふのひくわん二いらす、しむ
へうなり、このくにハきはめ
てしむこくなり、かまへてく
くしたるもの

らうせきすな、御人とも二、みな
ふれまわすへし、けふらう
せきしたるものとは、
こさたあるなり、けふの
ひくわん二いらぬほどに、あすの
すくていりなんハ、あこん
のことにてあるへきなり

(平盛時)

八月十五日

盛時奉

(畠山重忠)

庄司次郎殿

『源頼朝袖版平盛時奉書』【島津家文書】
原資料：東京大学資料編纂所蔵
翻刻資料提供：埼玉県立嵐山史跡の博物館

文治5年(1189)8月15日付、阿津賀志山(福島県伊達郡
国見町)の合戦に勝利し、乗じて軍勢が乱暴狼藉を行わない
よう監督することを重忠に命じた文書です。袖に頼朝の花押。

た丁寧な執拗ささえ感じさせる会話が
写實的に記述されます。「これへ、こ
れへ」とか対称「そこ(あなたに)手
こひ申すぞ(お願い申すのだ)」とか
「是は我ながらも、非合の事にて候(私
としたことが、とんだ失礼を)」など、
年長で高位の主人とは思えない、この
会話の謙譲や尊敬の語法に注意して下
さい。頼朝の自分の主張をどうしても
押し通す粘液体質と饒舌に対して描写
される重忠に、自然に清冽さを印象づ
けます。「これへこれへ」など招いた
高貴の主人頼朝に、挨拶もせず物静か
に立ち去るところがクライマックスで
す。そして対比して起こる後味の悪い
気分を頼朝に残すことになります。大
力を讃嘆できなかった隘路には効果的
です。単なる誇張された「大力」譚で
はありません。これはまさしく、その
場にあつた人物が、鋭利な視点と感情
で切り取った素材を、それを受けての
再構成の成功です。すごく自然に歴史
上の人物を人間として描き出した名作
でしょう。

頼朝を「大将」とした呼称は、「安
貞元年(一二二七)十二月二十二日、
関東御教書案」(鎌倉遺文)古文書編・
三七〇九)でも使われています。当時
の使われ方と思われます。庄司次郎は、
「著聞集」の同じく六九八話で、重忠の
討たれた年を記憶しているという、し
みじみした使われ方をしています。「吾
妻鏡」では、次郎重忠ですが、在世当
時は「庄司次郎」が一般であつたよう
です。(ちなみにこれは、畠山庄の領主
の次男という肩書きのような仮名です)

この名称の重忠は、「文治五年
(一一八九)五月十五日源頼朝袖判平
盛時奉書(島津家文書)」にあります。
奥州征伐に先陣として睦奥国の国府
(多賀城)に進軍した北条と重忠の国
府への侵入をさげ、狼藉をさせなかつ
た事を「神妙である」と褒めた上で、
なお重ねて狼藉禁止の励行を求めた。
陣中で緊急に頼朝が口述し、右筆に軍
記させたその慌ただしさと臨場感を伝
える文面です。急いで文面を訂した跡
も残り、さらに頼朝自身が文頭(袖)
に花押を据えた貴重な文書です。頼朝
は文中で「北条氏」は「北条」、重忠
は親しげに「庄司次郎」と仮名で呼び
かけます。宛名も「庄司次郎殿」です。
戦時の慌ただしさの中に重忠への頼朝
の戦士としての期待と、且つ花押を据
えた細心さ、軍陣での頼朝と重忠との
親近を感じさせるところがあり、「古
今著聞集」の頼朝からの会話の雰囲気
に似たものを感じます。難解な部分が
あるのですが、戦時、緊急の中での心
遣い、気持ちや伝えようとする臨場感
ゆたかな中世文書です。